

## 課題研究企画並びにラウンドテーブルの要旨

6月16日（土） 課題研究企画 13:00～16:30

|       |             |                      |      |
|-------|-------------|----------------------|------|
| 全体会 1 | 13:00～13:10 | テーマ設定の趣旨説明           |      |
|       | 13:10～13:30 | 小学校における「指導と評価」の計画と具体 | 松本先生 |
|       | 13:30～13:50 | 中学校における「指導と評価」の計画と具体 | 小田先生 |
|       | 13:50～14:10 | 「指導と評価」の計画と具体        | 石川先生 |
|       | 14:10～14:25 | 質疑応答(全体)             |      |
| 分散会   | 14:40～15:40 |                      |      |
| 全体会 2 | 16:00～16:30 | 各分散会報告並びに質疑応答        |      |

### 確かな学力の定着にむけた「指導と評価」の計画と具体 ー器械運動の授業づくりを例にー

#### [テーマ設定の趣旨]

新学習指導要領（小学校は平成 23 年、中学校は平成 24 年、高等学校は平成 25 年から実施）では、確かな学力を保障する観点から、指導内容の明確化が謳われ、発達の段階のまとまりを考慮した指導内容の体系化が図られた。これらの改訂と連動して、本課題研究では、第 13 回大会から「教科内容の明確化とそれに対応した教材化や学習指導の在り方」を取り上げ、第 16 回大会では「指導と評価の一体化」をテーマにして確かな学力を保障するための「指導と評価」のあり方を問い直した。第 16 回大会では、体育科・保健体育科における指導と評価の課題（木原氏）、新学習指導要領に基づく指導と評価の在り方（佐藤氏）、ポートフォリオ評価とルーブリックの開発（梅澤氏）について、それぞれの立場から提案して頂き、確かな学力の定着に向けた「指導と評価」の在り方について議論を深めた。

そのことを受け、第 17 回大会では、より具体的な単元や授業に焦点をあて「指導と評価の一体化」について議論を深めたい。今回の課題研究では、小学校並びに中学校の具体的な事例に基づきながら、授業計画の立案、授業過程での教師の指導活動、学習成果の把握など「指導と評価の一体化」の具体と実践的課題について、また、国立教育政策研究所の学習評価に関する参考資料の趣旨とその具体的な活用についても議論に加え、確かな学力を保障する「指導と評価」とはどのようなものか、分散会を通して「指導と評価」の計画と具体について考えたい。

・総合司会：日野克博（愛媛大学）・中井隆司（奈良教育大学）

・演者

①小学校における「指導と評価」の計画と具体 松本格之祐（桐蔭横浜大学）

②中学校における「指導と評価」の計画と具体 小田啓史（広島大学附属東雲中学校）

③「指導と評価」の計画と具体 ー国立教育政策研究所 評価事例集からー

石川泰成（文部科学省，国立教育政策研究所）

分散会司会 ①中井隆司（奈良教育大学）

②木原成一郎（広島大学）

③日野克博（愛媛大学）

## 1 日目の会場について

全体会 教育学部 L205

分散会 第一会場 松本氏・中井氏（司会） L102 教室

第二会場 小田氏・木原氏（司会） L104 教室

第三会場 石川氏・日野氏（司会） L205 教室

### 【発表要旨】

#### ①小学校における「指導と評価」の計画と具体 松本格之祐（桐蔭横浜大学）

「指導と評価の一体化」（教えたことの評価、評価の結果を指導に生かすこと）を持ち出すまでもなく、本学会が継続してその論議の対象としている評価が単独で存在しているわけではなく、評価する対象との関係で存在している。したがって、授業レベルで評価を問題にしようとするれば、必然的に指導の対象となる運動・教材はもちろん、ねらい（単元、本時）や指導法、学習成果に対する評価のあり方と、評価の結果を受けた対象の具体的な改善が問われることになる。

私が依頼されているのは、小学生を対象にした器械運動の授業づくりと評価の関係である。当日は、中学年のマット運動の授業を例に、目標・内容・方法・評価について発表したい。取り上げる単元の目標は「後転の技能を高めること」「前転・後転を組み合わせた集団マットの作品づくりと発表ができること」である。お話しする「授業計画」（単元計画、教材づくり、学習環境・場づくり等）、「指導の具体」、「評価・点検の方法」、「授業計画等の見直し」について、当日の参会者の評価を受けることになる。

#### ②中学校における「指導と評価」の計画と具体 小田啓史（広島大学附属東雲中学校）

中学校保健体育科の観点別評価欄の観点は、1) 運動や健康・安全への関心・意欲・態度、2) 運動や健康・安全についての思考・判断、3) 運動の技能、4) 運動や健康・安全についての知識・理解、である。本発表は、私が 2010 年度に中学校 2 年生男子を対象に行った「マット運動～よりよい連続技づくり～」の授業実践を対象に、指導改善につながる形成的評価を、どのように計画し実施したかを報告する。さらに、その授業で「よい連続技のポイントを理解しその知識を活用して演技の良しあしを考え、判断する力」すなわち「観察力」（「運動に対する思考・判断」の観点）の総括的評価の方法として開発したパフォーマンス課題とルーブリック（評価指標）について報告したい。

私は、生徒が知識や技能の獲得に向けて意欲的に学ぶ体育授業を目指している。意欲的な学びとは、目的的で探求的な学習活動である。このような学習活動を展開するためには、教師が提示する目標を生徒が達成すべき目標として認識する、つまり、生徒と教師が目標や評価基準を共有することが大切である。そのための方略として、生徒と教師が共同で評価基準を作成する授業づくりが有効ではないかと考えた。本実践では「観察力」について生徒とすり合わせた評価基準を形成的評価や総括的評価の基準として活用した。

#### ③「指導と評価」の計画と具体 -国立教育政策研究所 評価事例集から-

石川泰成（文部科学省，国立教育政策研究所）

「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」が小学校、中学校、高等学校の校種ごとに国立教育政策研究所教育課程研究センターより示された。本資料には、学習指導要領の各教科等の目標や学年・分野別目標及び内容，評価の観点及びその趣旨を踏まえた，評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例とともに，評価方法の工夫改善に係わるものとして，単元の評価に関する事例を併せて示し，各学校の参考としている。シンポジウム及び分散会では，本資料に掲載された「器械運動（マット運動）」（第 1 学年）の事例を取り上げる。ここでは，学習した基本となる技の出来映えを高めたり，難易度の高い技に挑戦したりする，器械運動の特性や魅力を踏まえた単元計画（指導と評価の計画）を示している。その際，技能，態度，知識，思考・判断の導内容の確認，学習活動に即した評価規準の作成，単元計画（指導と評価の計画）の作成を手順とともに解説する。目標に準拠した評価について，その考え方と「指導と評価」の計画と具体について検討を進めたい。

2日目の会場について

松本氏 L107 教室 竹田氏 L109 教室

木原氏 L202 教室 有山氏 L206 教室

原田氏 北体育館 1F 寺坂氏 L102 教室→北体育館 3F

※全て教育学部 L 棟で行っておりますので、会場間の移動は容易です。

＜第1会場＞(L107 教室)

演題：体育学習とデジタルコンテンツ利用

提案者：松本奈緒(秋田大学)

趣旨：動きを学習する体育学習において、映像や情報をデジタルコンテンツ化し、どのように利用するのかという問題は教材づくりに関する興味深いトピックスであろう。PC や iPad 等多様化したデバイスを用いてネットで入手できる様々なコンテンツ、独自に作成した学習者のコンテンツ等をどのように学習に効果的に活用したらよいか、論議を深めたい。また、提案者からは、工学系の研究者と共同開発を行っているモーションキャプチャを用いた舞踊学習支援装置について話題提供を行う。

＜第2会場＞(L109 教室)

演題：運動技術・戦術指導における教育内容・教材の順序構造とその構成方法について(2)ーサッカーとフラグフットボールの指導ー

提案者：竹田唯史(北翔大学)

共同提案者：進藤省次郎(園田学園女子大学)、宗野文俊(北海道大学大学院教育学院)、佐藤亮平(北海道大学大学院教育学院)、近藤雄一郎(北翔大学非常勤講師)

趣旨：体育科教育の中心的課題として、各スポーツの技術・戦術の指導が位置づけられている。この技術・戦術の指導については、これまで多くの研究や実践がなされてきている。しかし、依然として技術・戦術の内容・教材・方法の概念が曖昧で、それらを如何に構成して、すぐれた授業(わかる・できる授業)を作り上げていくかという方法論については未確立のままであると考える。我々は、1985 年頃より、スポーツの技術・戦術学習における教育内容(認識対象)・教材(習得対象)・教授方法・評価についての教授学的研究を進めてきた。本ラウンドテーブルにおいては、昨年度に引き続き、その基本的な研究方法の発表と、サッカーとフラグフットボールの指導事例を提示し、技術・戦術指導について議論を深めたい。

＜第3会場＞(L202 教室)

演題：教師の力量形成を支えるよりよい現職研修のあり方を考える

提案者：木原成一郎(広島大学)

共同提案者：徳永隆治(安田女子大学)、林俊雄(梅光学院大学)、大後戸一樹(広島大学)、岩田昌太郎(広島大学)、久保研二(広島大学)、村井潤(武庫川女子大学)、加登本仁(滋賀大学)、嘉数健悟(沖縄大学)

趣旨：教員の資質能力は、養成段階を含め教員の生涯にわたり絶えずその向上が図られるべきものである(教養審第3次答申, 1999)。実際に、日本の教師たちは公的な研修や自主的な研修への参加、自己研鑽等を通して力量を高めてきた。その中でも、教師同士のネットワークによる自主的な研修は日本特有の学校文化であり、海外からも注目されている。しかし近年、新任教師の大量採用による教員の年齢構成の偏りや、教師の多忙化等により、かつての教師文化が衰退しつつある。公的な研修の整備が進むなか、「教員免許更新制講習」をはじめ大学にも現職教員の力量形成に一定の役割が求められている。

私たちの研究グループでは、2009 年度より「現場の教師が必要としている研修とは何か。また、大学教員としてどのような援助ができるのか。」をテーマとして、より

良い現職研修のあり方に関する研究を進めてきた。

本ラウンドテーブルでは、私たちの研究グループが行ってきた研究成果を、現職教師が求める研修の内容という観点と、教師の置かれた立場の違いによる現職研修に参加する目的の違いという観点から発表する。そして、これらの研究成果をもとに作成した現職研修プログラムを提案する。当日の発表には、初任教师（若手教師）、中堅教師、熟練教師にコメンテーターとして参加して頂き、ご自身の経験（つまりきや悩み）をもとにコメントを頂く予定である。これらを踏まえて、ご参加頂いた方々とよりよい現職研修のあり方や大学の果たすべき役割について議論したいと考えている。大学教員の方はもちろん、教師を志す学生・院生、初任・若手教師を指導する立場の先生方に積極的にご参加頂き、積極的な議論をして頂ければ幸いである。

#### ＜第4会場＞（L206 教室）

**演題：**『今、私たちは柔道授業で何を教えるべきかー武道必修化時代の柔道学習ー』

**提案者：**有山篤利（聖泉大学）

**共同提案者：**藪根敏和（京都教育大学）、藤野貴之（京都府立乙訓高等学校）、中嶋啓之（京都産業大学附属中・高等学校）

**趣旨：**柔道部における重大事故が大きく報道で取り上げられるとともに、武道領域の必修化に伴って中学校で柔道が実施されることに対して、保護者そして教育関係者から危惧の声があがっている。しかし、学校体育を取り巻く現状では、この柔道という格闘技に内在する危険性を、部活動に代表される競技のコンテクストで捉えるのか、体育学習という教科のコンテクストで捉えるのかという基本的立場も整理しないまま、いたずらに「how to」的な対応を重ねている。

そこで、このラウンドテーブルでは、体育学習という教科の立場を明確にしながら、「柔道授業で何を教えるのか（what）」という原点に立ち返り、運動学習の専門家である体育教員が組み立てる安全で効果的な柔道授業について、参加者による実践報告を交えながら議論を深めたい。

#### ＜第5会場＞（北体育館 1F）

**演題：**『1.2.3 遊び』のダンス（表現運動）教材としての検討

**提案者：**原田奈名子（京都女子大学）

**趣旨：**イメージと舞踊運動の往還を速やかにすべく、イメージから運動へ、運動からイメージへの指導法が主流である。本教材案は、はじめの約束事を緩やかに破りながら、次第に自由度の高い表現にたかめるプロセスについて、どこからがダンス（表現の橋渡しになる）かを提供します。初心の先生でもできるべく、下敷きともいえるやり方についてみなで検討したい。結果が、運動の連続体に終止しようがイメージの元に集約されようがまずは自発的に連続して表現が続けられるかを重視した教材素案です。

##### ＊『1.2.3 遊び』の概要

「表現（創作ダンス）」編：パートナーワークから始め、次第に近隣のグループを視野に入れた活動に広げ、最終時には大きなグループによる作品にまでたかめる。要領は、①二人組で1. 2. 3と交互に番号を言う、②3を言う代わりに3を言うべきタイミングで何らかのアクションをする、③アクションの動き方を空間的に広げたり、時間の変化要因も意識し長い動きに挑戦、④二人の距離が離れてくるため相手の声が聞こえない、そこで各自がタイミングを自己判断して動き始める（最初のルールである順番を離れ、自発行為に発展）、⑤近隣のグループの近くに位置したり動きを真似たりと、他のグループも意識して動く

「（リズムダンス（現代的なリズムのダンス）」編：低学年例示教材フォークダンス「キンダーポルカ」やレクリエーションダンス「ジェンカ」を導入にして、ステップを1. 2. 3(123と刻む)と動くことによって、自由度の高いリズム系のダンスに導く。

＜第 6 会場＞（L102 教室から北体育館 3F へ）

演題：動きの「感じ」と「気づき」を大切にした陸上運動の授業づくり－短距離走・リレー－

提案者：寺坂民明（体育カリキュラム研究会）

共同提案者：神谷潤・神崎芳明・成家篤史・濱田敦志・石塚諭・鈴木直樹（体育カリキュラム研究会）

趣旨：体育では、運動の機能的特性に「楽しさ」を求めつつ、達成志向の授業づくりが一般的であった。しかしながら、私たちの研究会では、運動の魅力を感覚的な動きそのもののおもしろさに求め、おもしろさを享受しつつ身体が「気づいていく」という学びのプロセスを大切にした授業づくりを探求し、実践を重ねる中でその重要性を確信してきた。また、第 14 回大会以来連続して実践的な研究に基づきながら提案をし、これまでの 3 回の発表で、授業のコンセプトや子どもの生き生きとした学びの実際から高い評価を得ることができたが、「特別な実践」という域を脱することができなかった。そこで、第 4 回目となる今回の発表では、敢えて達成志向に陥りがちな「短距離・リレー」を研究テーマとし、誰もが実践しえる為の、授業づくりの視点を明らかにしてきた研究の成果について、報告、実践、議論をしていきたいと考えている。